

【会議録】

会 議 名	第3回「港区平和都市宣言40周年記念冊子」等作成業務委託事業候補者選考委員会
開 催 日 時	令和6年6月28日（金）午前10時15分から午後12時20分まで
開 催 場 所	港区役所9階913会議室
出 席 者	出席者 5名 都倉委員長、小松委員、片山委員、山本委員、小坂委員 欠席者 なし
事 務 局	総務部総務課人権・男女平等参画係長大久保、堀口
会 議 次 第	1 開会 2 第二次審査実施概要について 3 事業候補者によるプレゼンテーション及びヒアリングの実施 4 第二次審査結果及び事業候補者の選定について 5 その他 6 閉会
配 付 資 料	資料1 第二次審査実施概要 資料2 二次審査採点基準表 資料3 得点集計表 参考資料 選考基準・仕様書

会議の結果及び主要な発言

(発言者)

委員長

- 1 開会
(開会の挨拶)
- 2 第二次審査実施概要について
(事務局から審査方法について説明)
- 3 事業候補者によるプレゼンテーション及びヒアリングの実施

事務局

【A事業者のプレゼンテーション】

A委員

今回様々なデジタル展開等の提案がありますが、過去にも3回作成されており、将来に渡って記録を残していくような、長い目で見ると記録の側面もあると考えています。このようなデジタルコンテンツはどのような効果的な発信が続くのか、半永久的のような視点で見た時にどのようなようになるか教えてほしいです。

A事業者

最初に盛り上がりを作るための施策と、ロングスパンで効果があるものと2種類あります。例えば、今回のインタビュー内容を10分程度の動画にしたYouTube等で使える動画、音声コンテンツ、電子書籍は長くホームページ等に置き、ダウンロードできるようにして様々な場所で上映や活用することが想定できます。Xのタイムラインに流してブーストをかけることは、最初だけかもしれませんが可能と考えています。一方で、ショート動画、ミニ動画は冊子の配布を始めたこと自体をニュースとして扱うため、初期段階で様々な形で拡散し認知させる形で使うことができます。ただ、冊子の中身を伝えるミニ動画も3年後、5年後にまた流して「こういうものがあるから読んでみて」の形で使うこともできます。それぞれに適した形の施策を分けて使っていければと考えています。

B委員

2点質問があります。1点目は、若者が戦争体験者に聞き取りをする際にインタビュー経験の豊富な編集者が指導されることについて、今回は一般的なインタビューと異なり、戦争体験というかなりセンシティブでトラウマを引き起こしてしまう恐れがあり、聞き取り手にとっても何らかの心理的な影響が生じる可能性がある状況かと思いますが、このことについて何か対策等がありますか。

A事業者

弊社は様々な受託案件、受託以外のメディアを作成しています。その中には政治的な方にインタビューする機会、老人福祉施設の案件も行っていて、介護施設の方々や子どもたちを相手にしたこともあります。弊社の内部スタッフや外部で頼むライターの中にも経験者が多くいて、経験者に基本的に依頼するため、確実にアサインを行い指摘通り慎重に進めることができます。

B委員	<p>2点目は、私も個人的に戦争体験の聞き取りと発信に関わったことがあります。その際に「炎上」する状況に出くわしたことがありました。戦争体験者が何気なく使っている言葉が、実は特定の人物達にとっては気分を害することや、差別用語に当たることも多々あります。アウトプットを出した時に社会から批判が来ることも考えられますが、これに対し製作過程において、どのようなリスクヘッジの体制を取っていますか。</p>
A事業者	<p>年々とても厳しくなっています。まずはすべての方に不快な思いをさせない表現になっているか、あらゆる案件で注意して作成しています。そのような経験を積んだ人間が担当し、今回は外部監修者に加えて外部校閲の会社も入れ、社内編集者の感覚以外で配慮できる会社にも見てもらおうと考えています。また、動画やデジタル配信は更に気を付け、特に YouTube 等で見せる場合は十分認識して進めていきたいと考えています。</p>
C委員	<p>マルチメディアやSNSでの展開がとても得意で魅力的と思いつつ、マルチメディアで展開するということは企画や台本、編集等がそれぞれ平行に作成しなければならないと思います。提案書では「まずは記事をベースに作っていく」と書かれていますが、動画やSNSの他のメディアの戦略は、冊子の記事がベースであくまで入口的なものなのか、それともコンテンツとして独立するような形で作ることを考えているのかの設計等があれば教えてほしいです。</p>
A事業者	<p>あくまで今回は40周年記念冊子の紙冊子を作成するプロジェクトと心得ているため、YouTubeの動画作成や音声コンテンツ作成等は、あくまで入口を作るための「サブ」であると考えています。</p>
D委員	<p>2点質問があります。1点目は、デザイン会社、編集プロダクション、ライターが他の事業者で実施予定ですが、その際に進捗管理や編集をしていく上で、例えば方針の変更、港区側からの要望が入った際にどこまで臨機応変に対応できるのでしょうか。まとめていくのが大変だと思いますが、どのように考えていますか。2点目、冊子の「伝わった状態」を作るための説明で「読者と同じ価値観の基で取材をする」で「より共感性を付与できるインフルエンサーを活用する」とありますが、具体的に教えてほしいです。</p>
A事業者	<p>1点目です。弊社は受託案件や自分たちの雑誌・メディアもほとんどは外部の協力会社と共に、その都度信頼できる人間とチームを組んでいます。混合チームで進行管理等の方針を決めることを生業としている社内の人間でチームを結成するため、意思伝達は社内だけのチームと同じスピード感で行うことができます。港区の要望、指摘等に関しても窓口担当を配置し、担当者と言えば何でもすぐに伝わる体制を取るため、心配なく進められると思います。</p> <p>2点目です。「インフルエンサー」と表現をした結果「ユーチューバー」「インスタグラマー」の様なイメージになってしまいましたが、今回は大学生・高校生</p>

	<p>が取材をするため、港区からの提供情報と合わせて学生たちに取材を行い、発信者がより共感性を持てるような人物を選んでいきたいと思っています。</p>
E 委員	<p>提案書の中の監修者について「出版社グループとしての繋がりを活かして提案を行う」ということでしたが、専門家の候補はいますか。</p>
A 事業者	<p>具体的にリストアップを行っていませんが、文学作品、実用書、映画等を弊社は作成しており様々な繋がりが 있습니다。教育事業も行っている経験を活かし、様々な効果的な形を提案する予定です。</p>
A 委員	<p>この種の事業は恐らくどこでも同じような形で行っている物がありますが、「港区だからこそできること」「港区だからこそ出せる魅力」のような点はどこにありますか。</p>
A 事業者	<p>今回提案を作成するにあたり、教育機関と企業が多くあることで、世代を引き継ぐ若者が教育の意味でも十分に伝えることを重視するイメージがあります。港区は他自治体に先駆けた取組を行っており、「港区だから出せた物」を作成し、そのことをメッセージとして出せることが港区ならではのと思っています。</p> <p style="text-align: center;">【B事業者のプレゼンテーション】</p>
A 委員	<p>今回の事業にあたって「客観性」を担保するための方法、或いはチェック体制の考えを教えてください。</p>
B 事業者	<p>監修が重要になると思います。体験談の内容そのものについて合っているのかわからないのだけでなく、それにどのような形で対処できるのか両方を監修者に依頼したいと思います。例えば体験者本人の記憶違い、取り違い、極端に偏っていることも多いと思います。誤認識部分を「間違い」として文章を直してしまうことは、いけないと思います。そのまま掲載して内容について一定のコメントを監修者からいただくか、別の章立ての形で年表、地域的な分布、時間軸、地域軸の中でそのような部分についての情報を出します。できれば紙面の中で合わせて「こちらの方もご参照ください」の形で誘導する方法によって、十分ではありませんが一定の担保の部分は図れると思います。</p>
B 委員	<p>2点質問があります。1点目、冊子やコンテンツを見た人達に「どのように変容して欲しい」と捉えているか、簡潔に教えてください。2点目、様式8「オフラインでの関連のリアルな活動」について、今回聞き取りを行う高校生・大学生たちは、きっと将来港区を支える中心になり得ると考えています。若者たちの活動が、ある種コミュニティとして残ることは価値があると考えますが、具体的にどのような団体と連携できるのかイメージが湧かないため、アイデアがあれば教えてください。</p>

B事業者

実際に高校生・大学生たちがどれだけ関わるかについては、数年前だったら恐らく違っていたと思います。この数年コロナと戦禍（ウクライナ・パレスチナ）を経験している高校生たちが、どのように関わるのかがポイントだと考えています。例えば、以前でもこちらや他の所で、10年前の戦後70年時でも、様々な形でこのようなことに関わりましたが、その時に比べてもより説得感がある形で彼らは考えていると思います。彼ら自身が、SDGsやESDなどのネイティブ世代でもあるため、そのような世代の人たちが社会問題を自分自身の将来と繋げています。また、重要な題目ではない形で考える人達からも、今回ある程度応募があると思います。他人ごとではなく、極端に言うと日本でも実際に起こって、今後ひょっとしたら何らかの形で巻き込まれるかもしれない切迫感のある体験を聞き取ることで、自分なりの受け継ぎ方をすることができると良いと思っています。

どのような団体を取り上げられるかは、様々な党派性も関わるため選択は難しいです。ただ、例えば芝方面で昭和の色々な語り部等を行っている団体はあって、公共施設の中でも継続的に活動して冊子も作成しています。そのような方々に話を聞くこと、場合によっては今回の取材の中でも話をさせていただく場を設ける、或いはそのような方々の活動内容を先ほどのポータルサイトの中で紹介します。若者たちのインタビューもどこかで設けることになるため、そのような団体の活動にどのように自分たちが関わっていくのかについても話を聞いた上で、できれば活動そのものと今回の取材のプロセスをどこかで繋げて、例えば広報誌等で話題にする、番組でも話題にすることができるとショートレンジの盛り上げに繋がると思います。できればそのようなところまでできると良いと考えます。

B委員

関連資料様式8-aについて、今までの第1集から第3集を、第4集と繋げた形に、ある種物語として編集しながらショートレンジとロングレンジで魅力的に発信することは、第1集、第2集、第3集のストーリーの部分を何かストーリー立てて調査しながら行うと思います。それと同時にプラスしてショートレンジ的な若者に伝える動画やウェブサイトと、ロングレンジ的に実際に繋げてきた第4集だけではなく、今後作成していくものがまさに雛形として繋げていく、とても大きな構想の企画資料になっていると思いますが、その点はどういった考えや経緯で企画として思い付きましたか。過去の業務実績から経験則があれば教えてください。

B事業者

弊社が10年前の戦後70年の時に、既にその段階で戦争体験者が減ってきていることがありまして、それをどのように受け継ぐことが大事かと思っています。一方で今回提案の中で第1集、第2集をまず見ようと思ってもPDFやデジタルブックで見ることができません。図書館等へ行けば手に取って見ることができそうですが、そういう部分にアクセスしアプローチすること自体が難しいことを何とかできないかと思っています。逆に言う「そういうことが有るのか。」をまず知ってもらうために、第1集、第2集もカバーして載せることは大切だと思いました。そのような内容の部分を何らかの形で繋げていくことが必要と思ったことが一番の

きっかけです。一方、第3集は今回弊社が提案したものと割と近い発想で作られているところもありますが、第1集、第2集はもっと体験そのもので本当にオーラルヒストリーの一番コアな部分だけが載せてあると思います。ただ、色々な形でランダムに掲載しているところがあり、若干整理するだけでも引きやすくなると思います。第1集、第2集の目次だけでは見えない部分を分かりやすくすることで、今回の高校生・大学生たちに取材するときに学生自身もその部分の第1集、第2集も目を通してくれると良いなと思うところがありました。そのようなところの糸口として彼らにも知ってもらおう上で「そういうものがあるんだよ。」と知らせる、今回コアメンバーになった人たちが今後も中心になって次世代の若者にとって調べやすくすること、例えば今後の平和に関する学習を学校等で行うのであれば、その際にこれを使用する1つの糸口になると思いました。敢えて言えば、将来への教育や使い方の上で誰もが何かそれで調べて学ぶことを当たり前に行えるようになることが良いと思いました。そのような最低限の整備をすることが今回の機会の1つの動機かもしれません。

D委員

業務のスケジュールで募集要項の契約は9月ですが、スケジュールは7月から9月に契約した場合、間に合うようにこのスケジュールは詰められますか。

B事業者

募集要項でそのように記載があることは重々承知しています。3月までに納品しなければならないため「早めに対応できたら」の希望を含めてスケジュールを組みました。ただ契約上は作業をしなければならないことを承知しているため、担当者と打ち合わせを重ねながら、どこを圧縮できるか、どちらもできないところも多々あると思うため、そのようなところは協議を踏まえながら希望に沿った冊子作り等々を進めたいと思います。スケジュールは別途相談します。だいぶタイトなスケジュール感にきつくなると思いますが、スタッフ一同協力して第4集の集大成を完成まで持っていきたいと考えています。

D委員

どのあたりを詰められますか。

B事業者

取材だけであればぎりぎり可能かもしれません。ただ、研修の期間的な部分でインタビュー或いは歴史についての学習を行う期間等は、圧縮対象になりやすいと思います。もう一つは、客観性で監修者に内容についてのコメントをいただくようなことが本当はあると良いと思います。そうすると原稿の構成と別に、内容についての確認をいただき、それを前提としてまた監修の先生から原稿やコメントいただくことも本当はできると良いと思いますが、その部分の時間が圧縮対象になってくる可能性が場合によってはあると思います。

D委員

そうすると十分な監修ができませんか。

B事業者

ある程度全体としての監修で、前振りの形等については客観性的な部分を先生方に示してもらうことは恐らく可能です。内容に即した形のところまで、例えば

	<p>関連しているところの誘導するところまでのコメントを紙面の中で起こすこと、WEBならばリンクを付けるところまでは時間的に難しくなる可能性はあります。</p>
E 委員	<p>2点質問があります。1点目、監修者として想定している人物がいますか。2点目、第1集から第3集もインデックス的に編集する素敵な提案だと思いますが、第1集と第2集それからPDFの第3集に興味を持った方に、どのように繋げていけば良いかの理由や具体的な提案、若しくは「区役所としてこうした方が良いのではないかという提案」があれば教えてください。</p>
B 事業者	<p>監修者は第3集の先生が良いと思います。内容的にも非常にバランスが良かったので、今回も可能であれば同じ先生にお願いできればと思います。確かに第4集を見て興味を持った人が「第1集と第2集をもっとたくさん作りましょう。」は言いにくいと思います。どのようなところにあるのかと思われるので、例えば簡単な宣材リーフレット、Webサイトの中で第1集、第2集が載っている内容部分はできるだけ紹介します。その中で第1集、第2集、第3集の部分を振り返る形で、注意喚起程度で持っていければと思います。</p>
	<p>4 第二次審査結果及び事業候補者の選定について</p>
委員長	<p>(各委員より得点の発表) 講評をお願いします。</p>
A 委員	<p>A事業者は非常に手堅く十分に仕上げてくることが期待でき、とても安定感を感じる印象でした。デジタル展開については、実際は一過性で将来性・発展性が高い提案があまりないと思いました。また多くの事業の一つとして位置付けていると感じ、港区としての独自性や本事業に対する熱意等はあまり強く感じませんでした。一方でリスク管理と多くの実績がある故の安定感や信頼感は非常に高く持ちました。</p> <p>B事業者は顔の見えるチーム体制としての信頼感があり、組織力は小さいながらも社内での信頼感を持って取り組んでもらえると感じました。また短期的な意義と長期的な意義を見据えたプランニングは非常に魅力的であり、1集から3集についても統合した価値のあるものを目指している点は高評価でした。高校生・大学生が実際に行うことをイメージしたプランニングも好感が持てました。一方でスケジュールの問題は非常に見通しが甘いと感じられる部分があり、何がどこまでできるのかについては十分に詰めていく必要があると考えました。ただ、提案してきている水準が非常に高く質を落とさないために、どこを必ず欠かしてはいけないのかを最初に十分注意することに努めれば、高いクオリティでの成果を得られるのではないかと感じました。本事業としての熱意が感じられた点も高評価でした。</p>

B委員	<p>A事業者は依頼に対し誠実に対応してくれそうなところに好感を持ってました。一方で、あくまでも要項に沿って企画を提出したような感じで、冊子の意義や将来のビジョンがあまり読み取れませんでした。大手グループの中での取組という印象で、少し決まった型があるのか独自のネットワークがあるのかと思い、それが今回の冊子作成にとって良いのか悪いのか判断が付きませんでした。</p> <p>B事業者はかなりコンセプトが明確であり、それに伴って冊子を工夫したいところが一貫性を持って提案されていると感じました。また将来性のある提案に対し、柔軟に色々な関係者と議論してくれそうな雰囲気を感じました。この企画に対する熱意も感じたため、様々な取組の協働が期待できると感じました。一方でスケジュールや監修の精緻さに最後大きな不安ができた印象がありました。やはり客観性の担保の仕方と外部発信のリスクヘッジは強くお願いする必要があると感じました。</p>
C委員	<p>A事業者は前回の評価と同様です。SNSや若者、デジタル展開は詳しく、媒体を関連会社で恐らく持っており魅力的に見えました。ただどうしてもマーケティングに比重を置いており、提案資料に近いプレゼンテーションでした。マーケティングプラス実績がメインのプレゼンテーションで手段にフォーカスされ、企画のコンテンツ内容が見えて来なかったことが気になりました。SNSのマルチメディア展開を考える際に動画や別の媒体に発信する場合は、元となる雑誌コンテンツやコンセプトの指針が重要です。それをどのようなリレーションで行うのか、B事業者と比較してその辺の全貌が見えませんでした。そこを熱意でカバーできるところもあると思いますが、実績とマーケティングの話がメインで熱意の部分があまり見えてこなかった点に懸念があります。また、実際に選考された場合の内容については、業務の理解をして忠実に行うものの、それ以上のアウトプットはなく企画等がアップデートされたり、ミーティングを重ねていく場合に運営側の監修作業が増える点や、イレギュラーに対して対応できるような体制なのかについては懸念がありました。</p> <p>B事業者はA事業者側で見えていなかったコンセプトの詳細と、実際の読者の体験フローについて提案資料どおりプレゼンテーションのイメージが具体的でした。それがプレゼンテーションに参加しているメンバーで既に共有されている状態で、体制の厚みとチーム自体が実際の志を共有できているところが見えたのも好印象でした。新規性は過去の資料等を再利用しているところと、それをどのように未来に繋げていくのか今回の実際の公募にも無い公募以上の内容を提案しているところも非常に魅力的でした。進め方は、スケジュールについて不透明な部分を不透明と答え、相談したいことも正直に答えている姿が逆に好印象でした。例えばA事業者は「このコンテンツのボリュームで、この予定とこの体制で大丈夫なのかな。」と思わせる一方で、B事業者は逆に精密に書いたが故に計画通りにいかないところを、現実的に正直に伝えていることが私としては好印象でした。</p>
D委員	<p>A事業者は質問に対して的確に答えていました。スケジュール管理の連絡窓口と</p>

	<p>なるスタッフ等の役割分担が明確に出来ていることを確認できたので、進行に関しても安心感が持てました。冊子の編集に関しては、本当はもうひと工夫欲しいと個人的に思いました。ただその他の発信方法は、今の時代は冊子を手に取ってもらえないため、SNSを駆使する点で発展性があると期待出来ました。校閲や監修もかなり十分に考えているところが好印象でした。</p> <p>B事業者は冊子の構成について非常に工夫しており、過去の体験集の活用は今後について発展性と期待感が持てました。ただどうしても業務スケジュールが不安でした。年度末までに絶対に終わらせなければいけないところで、結局十分な時間が取れないからクオリティの低下、校正の不十分、場合によっては区の負担増の不安がどうしても拭えなかったため低くなりました。あとは今回のメンバーで本来は統括責任者が回すものですが、プランナーが場を仕切っていました。それで上手く回るなら問題ないですが、何かあった際に誰が責任者として「しっかりやってくれ。」と言ったら、ちゃんと向こうに全部に伝わって体制を立て直すことができるのか不安要素としてありました。</p>
E 委員	<p>A事業者は冊子に引き込む工夫は期待出来ると思いました。若者の情報取得の特性に対する分析は非常にしっかりしていました。一方でその分析が冊子の構成や中身にどのように反映されていくのか、資料以上に踏み込んだものがなかったので、あまり明確に分からなかったです。それからライター等を外部に発注することについて、今の港区の街に詳しくても、港区における戦災等の歴史に対する理解度がもしかしたら低いのではという不安がありました。ただ大手のため、それなりのクオリティは保証してもらえるのではないかと感じました。</p> <p>B事業者は冊子の将来的な継続的な価値を高めていく提案で非常に安心感がありました。各部門の担当者は今回同じ社内のチームとして揃っており、それぞれのコンセプトを明確に今日も提示していました。これまでの第1集から第3集をうまく活用できていないのは、所管課としても課題ととらえていたため、第3集までを活かしていく提案は非常に魅力的でした。本当にやりたいことが多くあってそれぞれ魅力的ですが、D委員のスケジュールに関する質問に対しての回答が不安でした。不安要素は残るものの、全体としてB事業者は安心感のある事業者でした。</p>
委員長	<p>各委員の講評を踏まえ、質問意見等点数の変更はありますか。</p>
C 委員	<p>D委員からの体制部分について「プランナーが指揮していることに対しリスクを感じる。」は確かにその通りと感じます。その点について懸念があるような要望等を伝えることは出来ますか。</p>
委員長	<p>体制を整えて欲しい要望ですか。</p>
C 委員	<p>どちらの事業者も、それぞれある程度懸念があるところがあるため、それを払拭、カバーできるように伝えられるのであれば、今の体制でも個人的に懸念があ</p>

	<p>まりないと思いました。確かにプランナーが仕切ることは、クオリティ重視になるが故にズルズルと伸びる可能性があることはおっしゃる通りです。それを伝え、ある程度コントロールすることはとても必要だと感じました。</p>
事務局	<p>契約を締結することになれば「選考委員会でこのような懸念が示されている。」ことを伝え「十分に統括してください。」と言うことは可能と思います。</p>
C委員	<p>「条件付採択でそこを修正してください。」の様な要望を伝えても良いと思いました。</p>
事務局	<p>出た意見として伝えるのは可能です。</p>
委員長	<p>点数の変更等がありますか。</p> <p>(委員一同、異議なし)</p> <p>(事務局による集計結果の発表)</p>
委員長	<p>B事業者を事業候補者として選定することで、よろしいですか。</p> <p>(委員一同、異議なし)</p> <p>(事務局から事業者名の発表)</p>
	<p>5 その他 (事務局より事務連絡)</p>
委員長	<p>6 閉会 (閉会の挨拶)</p>